

僕には気になる子がいた。

その子は無口で、特に男子と話しているのを見たことがない。結構つんけんしているようなイメージがある。クラスの女の子からはエリちゃんと呼べられてた。

白い肌にスレンダーな体、シンプルな白黒のシユシユでまとめられたポニーテールが、彼女の飾らない可愛らしさを引き立たせる。

ある日の放課後、僕はエリちゃんと帰路を合わせた。家の方向は大して違わないことはリサーチ済みだったので、少し遠回りになる程度だった。それは話しかける勇気が無かったわけではなく、何か悪い予感がしたからだった。

エリちゃんは白いコードのイヤホンを両耳に挿して、一人で歩いていた。

エリちゃんは交差点へと歩いていく。

そして、エリちゃんは信号の前で携帯を開いた。

その足は歩みを止めない。その時、視界に映った光景で悪い予感の正体に気付いた。

それと同時に、急激なスローモーションが起きる。

信号は未だ赤。しかし、エリちゃんは手元を見て歩いている。右からはトラックがお構いなしに走ってくる。当然と言えば当然だ、信号が青なのだから。僕は声をあげる前に駆け出していた。

「届けっ……!!」

僕の声が届いたのか、彼女は振り向こうとする。しかし右を見た瞬間に、彼女はその世界の中で静止する。

ドラマや漫画のように突き飛ばすような時間はない。僕には引つ張る力も無い。だから、勢いのまま押し倒すしかなかった。

初めて超至近距離で見た彼女の顔はとても整っていて、すごく可愛い。そんな言葉が死に際に出てくるなんて、僕はなんて幸せな思考回路をしているんだろうか。

「好きだよ」

「……は？」

エリちゃんには突拍子が無さすぎて何がなんだかわからないと思うけど、死にそうだし言っておこう。そして痛みを感じることなく、僕の体は宙へ浮いた。

Eri

「で、終わればきつと感動だったのにな……」

『僕もわかんないよ、何でこんなことになっちゃったんだろう』

「はあ……とりあえず、私の脳で振り返らないでよ。振り返るなら自分だけで振り返ってよ」

私は橘絵里。職業は高校生。趣味は読書……なんて言ってる。品行方正、みたいな印象があるから学校では読書で通してるけど……。ホントは休みなら外に出たくないし、家でのおんぴりするのが一番好き。

『僕は霧島薫。昨日転職したんだけど、職業は幽霊。趣味はテレパシー。脳内に直接言葉を流してるんだ』

「なんで真似するの……もう嫌。霊媒師でも呼ぼうかな」

『あ、それはいいかも。でも絵里ちゃん、霊媒師って霊を呼び寄せる方だけど、大丈夫？ 除霊してもらいたいんじゃないの？ はっ、もしかして僕を呼び戻そうと……』

「はあ……」

この幽霊は少し、いや、かなりめんどくさい。今日起きたら私に憑いててびっくりした。でも、仮にもこの人に助けられたから、恩はあるんだよね。

それはおとこのこと。

私は交差点で事故にあった。原因は私の不注意。でも、この薫くんがとっさに押し倒してきて、なんとか私は無傷で助かった。走ってきたのがトラックだったから、私の上をトラックが通過して助かったってわけ。

そのとき、フワ〜と薫くんから何かが浮かんでいったんだよね。それが幽霊どうかまではわからなかったんだけど、そのまま薫くんの体はどこか遠くに飛んでいって……可愛そうだったなあ。あれは即死だったと思う。私でもショッキングな映像だったから、気絶しちゃったもん。

『……絵里ちゃん、結構メンタル強いよね』

「そう？ 褒めてくれてありがと。でも、薫くんもでしょ。なんで死ぬときに告白するかなあ」

『あんまり褒めてないんだけど……やっぱりメンタル強いよね』

「うるさいなあ……そんな事より、薫くん」

『ん？ 何？』

「今、学校終わり。帰宅。制服」

『？』

「なんでここまで言ってるわかんないかなあ……着替えるのよ、部屋から出てよ！」

私はそばにあったぬいぐるみを投げつける。けど、やっぱり当たらない。ぬいぐるみはスルってスルーされて、部屋の端に置いてあったごみ箱を転倒させた。別にギャグじゃないからね？

『プククッ』

「もう、考えてること読まないでよ！ 薫くん、十秒以内に外に出ないと除霊してもらうからね！」

『はい』

イライラするなあ。薫くんがやっと出ていったから、私はやっと着替え始める。こんな生活が毎日続くとなると大変だなあ……とかちよつと考えた。

「絵里ー、さっきからガシヤーンとかドカーンな声が聞こえるけど、何かあったのー？」

「何でもないー、気にしないでー！」

一階の部屋からお母さんが話しかけてくる。が、意味がよく分からない。いつも通りだから別になんとも思わないけれど。

私はさつさとジャージに着替えると、いつもの定位置、パソコンの前に座る。

電源スイッチを押して十秒ぐらいすると、パソコンが起動した。

『ふんふんふーん、ふふーん♪』

聞き慣れた、パソコンの起動音……を薫くんが真似してる。なんだこの幽霊、真似してばかり。

『へえ、髪降ろしても可愛いね』

「お褒めにあずかり光栄だけど、何も出ないよ。薫くんも見た目は可愛いしモテそうだよね、男の子に」

そう投げやりに言うと、薫くんはなぜかプルプルと震えだした。ほんとに男の子にモテたのかな……。

そういえば、いつの間にか部屋の中に薫くんが入ってきている。きつと壁もすり抜けて、勝手に入ってきたんだと思う。ネット回線に流し込んでどこかに漂流させたいなあ。

デスクトップが表示される。私は右下を見ながら、ネットが繋がったところをみてアイコンをダブルクリックする。

それは最近、私がやっているゲーム。最近のゲームは皆でやるっていう印象があるけど、このゲームは一人で十分楽しめるから好きなんだ。

『へえ、このゲーム僕もやってたよ』

「えっ、薫くんやってたの？ IDちようだい、死んでるんだし」

『いいよ、IDはTACHIBANA_ERIでパスワードが19970728だよ』

「薫くん、その冗談つまんないよ。すぐやめた方がいいよ。あと何で私の誕生日知ってるの？ 気持ち悪いよ」

『カレンダーに書いてあったよ、七月二八日のところに『たんじょうび』ってひらがなで。あれ、何年前の？』

「いつ見たのよ、まったく……今年よ。悪かったわね、子供っぽい字で」
しまったなあ、仕舞ったらよかった、カレンダーを。

『プククッ』

「一瞬思ったことを全部拾うのやめてよ……もう怒る気力も無いや」

これ、いつまで続くんだろう。一生？ それはやめてほしいなあ。どうやったら成仏するんだろう？

『付き合ってくれたら成仏するかもなあ』

「何言ってるの、このバカ。幽霊と付き合えるわけないでしょ……まあそのうち消えるでしょ」

『うう、絵里ちゃん、恩感じてなさすぎじゃない？ 仮にも僕が君を助けたんだから、なんかやってよ、持ちネタ披露とか』

「薫くんって、バカだったんだね……見た目に反してるなあ。綺麗なバラにはトゲがあるなんて言うけど、やっぱ間違いじゃないんだね」

『やだなあ、そんな褒めても何も出ないよ』

やたら笑顔になる幽霊。何だろうこの幽霊。すごく鬱陶しい。

「はあ……成仏しないでいいから。ちよつと静かにしてて」

『早くも認められてしまった……嬉しいなあ』

「ただ諦めたただだよ……ゲーム集中するから。薫くんはクーラーの上にもいれば？」

『はい』

いい返事が返ってくる。気味が悪いから後ろを向いてみると私のベッドで横になっていた。

「もういいや、ホント……いないと思おう」

そう言ってる私は、ゲームの世界に埋もれた。

Bri

『……あのか』

薫くんが話しかけてくる。ご飯に呼ばれたからゲームは一旦やめることにした。今はベッドでゴロゴロしながら漫画を読んでいる。

「んー、なに？」

『こんなこと聞くのもどうかと思うけど、絵里ちゃんってこんな性格だったっけ？』

「……はあ」

確かに、学校では女の子らしく振舞っている。それはきっと周りに影響されて、それに私が合わせているから。私の趣味は普通じゃないし、性格もみんなが思っているほどちゃんとしてない。私だって普段通りで過ごしたい。けど、それで浮いちゃうのは嫌。理由はそれだけ。

「ま、薫くんは死んでるんだし、普段通りでいいかって思っただけ。それに……」

それに、薫くんは今日私の部屋を初めて見た。学校の私のイメージなら、想像もつかな

いような部屋。可愛らしさのない白黒の部屋。ぬいぐるみも寝る時に抱いて寝るための一つだけ。ちゃんとした本も少なくて、あるのは少女漫画や少年漫画。でも、薫くんはずっとニコニコしてた。私の部屋に幻滅したりしなかった。それが、そのままの私でいいって認められたみたいで、なんだかうれしかった。

『それに？』
「別に……何でもないよ。それより、薫くんは寝ないの？ もう夜の七時だよ。というか、さっさと寝たら？」

私は漫画をベッドの傍に置いて立ち上がる。薫くんは部屋の床で寝転んでいた。私はもちろん七時なんかには寝ない。まだお風呂にも入ってないし、まだまだ今日やり残したことがいっぱいある。全部、くだらない事だけだ。

『この体で眠れるのかな？ 僕、幽霊初日だからまだ慣れてなくて……』

薫くんは床でごろごろと動き出した。モジモジしてキモイね、ほんと……。

「絵里ー、いっお風呂入るのー？」

お母さんから呼び出しがかかる。私、橘絵里はお風呂が大好きだ。この切迫した日常の中で、癒しを感じられるお風呂が大好きだ。全世界の人に伝えたい。お風呂はいいものなんだよ。

ただ、今は面倒なお邪魔虫がいる。そりゃあもう、虫だけに無視したいんだけど、虫って感じの大きさじゃないんだよね。

『ククッ』

「……はぁ」

また拾われた。さっさと寝てほしいなあ……。考えてることが全部透けてるって、ほんとに恥ずかしい。

「……ん？」

意識してることが全部わかるってことは、さっき考えてたのも全部聞こえてたってこと？

『どうしたの、絵里ちゃん。さっきのって、そのままの私でいい、とかって話？』

「あ、ああ……」

顔を見なくてもわかる。私の顔は真っ赤になっているはずだ。薫くんはニヤニヤしている。前言撤回だ。こんな幽霊にどう思われても、何も嬉しくない。

「もう知らない！ お風呂入ってくるから。薫くんは来たら除霊だからね！」

私はドアを力強く開けた。ドアの外にはちょうど妹の美香がいたみたいで、ドアに直撃していた。おでこが少し赤くなってなお「ふふふ……」と呟いていた。気持ち悪いから放置しておいたけど、あんなところで何してたんだろう……。

「ふふふ……」

こんな状況に出会えるとは。

美香は橘美香。十四歳。

ご飯を食べて部屋に戻ろうと思ったら、お姉ちゃんの部屋から話し声が聞こえてきた。しかも結構大きな声。下には聞こえないけど、部屋の外には全然聞こえるぐらいのボリューム。

それを美香は、偶然持ってた超高音質録音プレイヤーで録音しておいた。偶然持ってたから、録音するしかないよね。

『もう知らない！ お風呂入ってくるから。薫くんは来たら除霊だからね！』

ふふ。笑みがこぼれちゃう。これはいい痴話喧嘩だなあ。

他の人の声は聞こえなかったから、電話かな？ お姉ちゃんだからインターネット通話かも。

「お姉ちゃんについて春が来たっ！ 美香が全力でサポートしないと！」

お姉ちゃんはお風呂に入れば最低四十分、長ければ一時間は出てこない。今のうちに、偶然持っていた盗聴器をお姉ちゃんの部屋に仕掛けよう。

ドアを静かに開ける。美香にだって罪悪感はあるんだよ。でも、美香がフォローしてあげないと！

お姉ちゃんの部屋は相変わらずパソコンとベッドと漫画があるだけ。

「……はっ！」

さっきまで通話していたのかもしれない、パソコンが起動したままだった。

「これはもう、隅から隅まで調べまくるしかないよね！」

お姉ちゃんはまだまだお風呂から出てこないはず。タスクにはADが起動状態で放置されている。ツールバーにはSkylineというインターネット通話のアプリがある。

私はそれをおそろおそろダブルクリックする。通話履歴は見知らぬ名前ばかりが十件ほど。一つ一つ見ていくけど、すべて女性だった。しかも、前回通話は五日前……。

「ハズレかあ」

美香は偶然持っていたドライバーで素早くデスクトップパソコンのカバーを外す。その中に偶然作った盗聴器を仕込んで、ネジを締め直した。

「よし、盗聴完了だ！」

盗聴器はメモリータイプ。音質は高めに設定してるけど、二日ぐらいは持つはず。また取りに来なきゃいけないから、ネジはゆるく締めておいた。

まだ時間がありそうだから、ディスプレイの電源をもう一度つける。暇だからお姉ちゃんのパソコンでインターネットを開いて履歴を覗き見る。

「え……なに、これは……」

検索の履歴を上から開いていく。“幽霊は実在するか”“幽霊の種類”“幽霊 憑りつく”“幽霊 消す”“幽霊 面倒くさい”。

「ほー……お姉ちゃん幽霊マニアだったのか……知らなかったなあ」

美香はインターネットを閉じる。履歴は美香の見た分は消しておいた。そして、美香はもう一つの可能性について考える。

「薫くんは来たら除霊だからね、つて、まさか。そんなことってあるのかな？」

もちろん、一昨日の事件は知っている。たしか助けてくれた人の名前は、霧島薫。そして、履歴の幽霊。

「うーん、でもさすがに無いかなあ……？」

まだ余裕はありそうだけど、ミッシュンは完了。早く自分の部屋に戻ろうと、ドアに手をかける。でも、そのドアは勝手に開いた。目の前にはお姉ちゃん。

「あ……れ？」

あれ、いつもより早くない？ やっちゃったなあ……。

Part

薫くんのせいでゆっくりお風呂にも浸かれなかった。何か漁られると面倒だから、お風呂は早めにあがってきた。ドアを開けると、薫くんはベッドを占領していて、ドアの前には妹の美香が……ってなんで？

「美香……なんで私の部屋に？」

お風呂入る前も怪しかったけど、こんなことはよくあるから別に気にしてなかった。私の部屋に美香がコソソリ入るのも、これが初めてじゃないのも知ってる。

「お、お姉ちゃん、今日はお風呂早いねー！ 美香、別に何もしてないよ！ ほんとだよ！ 姉妹なんだから信じて！ ねっ？」

……今日はいつも以上に怪しい。いつもならすぐ認めるから、すぐに認めないのも怪しい。

『絵里ちゃん。美香ちゃんがさつきパソコンの中開けてちっちゃい機械仕掛けてたよ』

はあ……盗聴器とかカメラとか、そんな感じのものかな……？ そんなものどこで手に入れたんだろう。美香らしいけど、それは犯罪だよ。駄目だよ。でもこの子、全然姉離れできない子だからなあ。そこも可愛いんだけど。

「美香、そんなに焦ってどうしたの？ パソコンの中に盗聴器でも仕掛けた？」

「そ、そんなことしないよ！ やだなあ、お姉ちゃん、美香がそんな子に見える？」

そんな子に見えるんだけど、気付いてないのかな。周りからもきつとそう思われているよ。あと、目が泳ぎすぎてどこを見ているのかわからないよ。はあ……。

『あと、お風呂入る前に何か録音してたみたい。部屋入ってから再生してニヤニヤしてた

よ』

「美香、私がお風呂入る前、何か録音してた？」

「ななな、なんでそんなこと、しっ……してないよ！」

明らかに声が上ずる。わかりやすいなあ。

『あと、インターネットの履歴見てたよ』

「美香、インターネットの履歴見た？」

「……………ふははっ」

美香は変な笑みを浮かべて後ずさり。早く認めちゃえば楽なのに……。

「いや、そっか。美香の考えは間違ってたんだ！」

と思つたら、急に開き直った表情。私の方を強いまなざしで見る。

「この部屋には“薫くん”がいるんだね！」

今度は、私と薫くんが固まる。薫くんはすごく複雑な変顔をしている。

『「……………はい？」』

ちよ、ちよっと。なんで美香が知ってるの？ 経緯がわかんない。いや、美香は小さいころから頭の回転がすごくて、頭もいいのは知ってる。でも、そんな簡単に理解する？

『まあ、いいんじゃない？ 美香ちゃん、可愛いし』

「美香に目つけてんじゃないわよ、除霊するよ？」

「んっ？ お姉ちゃん、どうしたの？」

純粹な十四歳の好奇の目が、私に突き刺さって、私には隠し通すなんて出来るはずがなかった。

Mika

「なるほどー……お姉ちゃん、憑りつかれちゃったんだ……」

「凄く残念そうに言ってるけど、顔がニヤニヤしてるよ」

お姉ちゃんには悪いけど、すっごく面白い！ 美香はこういうイベントを待ってたんだ！

「えっと、まず、薫くんはどこにいるの？」

「今、美香の頭の上に乗って変な顔してこっち見てるわ……」

お姉ちゃんは呆れる。頭に乗ってるらしいから、美香はお辞儀してみる。

『いたっ』

「あ、落ちた」

『よいしょ』

「あ、また乗った」

お辞儀。

『いたっ』

美香は薫くんが見えないけど、なんとなくわかった気がする。

「バカ……だね……」

お姉ちゃんは深く息を吐いて。

「うん……」

小さく頷いた。

Eri

久しぶりの学校。あの事件以来、学校に行くのは今日が初めてだ。

「あのさ、薫くん……」

『ん？ なんだい？ 愛の告白？』

「うん、肩に乗られると重いんだよね、気分が。だから離れて」

今の状況は、薫くんが私の両肩に足を乗せて直立している。何がしたいのか全然わからないんだけど、何やら楽しそうにしている。

『ちよつとよく聞こえないんだけどー』

嘘だ。頭の中が全部見えている薫くんは聞かなくてもわかっている。こういう時は振り落すのが一番だと、美香から教わった。

ちよつと前に怜子ちゃんが歩いている。ここは一つ挨拶しておこう。ちなみに怜子ちゃんは同じクラスで、結構仲がいい。眉のあたりで切り揃えたぱつんの前髪がすごく似合っている和風な女の子。

「おはよう！」

珍しく元気に挨拶。そしてお辞儀。薫くんは見事に体勢を崩して前に倒れた。

「あつ、絵里ちゃん。久しぶり……聞いたよ、大変だったね」

「あはは……この分だと皆知っているのかな。色々言われそうだけど……私は大丈夫だよ。何ともなかったから」

『僕の勇姿を皆知っているわけだ。じゃあもう公認カップルみたいなものだね！』

地べたに這いつくばっている薫くんが喋る。とりあえず踏んでいこう。

「でも絵里、運が良かったよね。薫ちゃんが助けてくれるなんて。なんかこう……少女漫画みたいだね？」

「そうなのかな……まあ、そうだね。生きてることに感謝しないとね」

なぜだろう。何か違和感を感じる。まあ、大したことではない気がするからいいかな。

そのあと、怜子ちゃんと一緒に教室に入った。私が席に着いても、誰も話しかけてくることはなかった。まあ、別に友達が多いわけじゃないんだけど。

『あれ、なんか寂しそうだね』

「別に話し相手が欲しいなんて思っていないよ……あと、一人で喋っていると変だと思われるし、話しかけないで」

『つれないなあ、遊ぼうよー絵里ちゃんー』

「はぁ……」

隣の名前も知らない男子がポカンとした顔でこっちを見ている。もうあれをするしかない。

「寝よう……」

Ep1

ぼーっとしているうちに、日本史の授業が始まった。

「はいじゃー授業始めます。起立礼はい着席ー」

日本史の加藤先生はいつも適当で、自由奔放な性格。授業もいつもよく分からない方向に行っちゃうけど若くて人気もある。いわゆる面白い先生だと思う。

『へえ、若くて人気もあるなんて嫉妬しちゃうなあ』

「うんまあ、薫くんよりは好感度高いかなあ」

考えるだけでも伝わるけど、結構やりにくいから、私は小声で話す。幸い窓際の席だから、誰もいない窓に向かって。

「それは誰だったかなー？ はい病み上がりの橘！」

「えっ、あ、はい！」

しまった。全然聞いてなかった。何の話だろう……。

「あの……」

『絵里ちゃん、一五六〇年に起きた有名な戦いって何だっけ？』

「あっ、桶狭間の戦い！」

私は控えめに人差し指を立てて……。

「……あれ？」

教室の空気が冷えて、教室にいる全員がポカーンという顔をしていた。

「橘……疲れてるのか。俺は今日総理大臣になった人の名前を聞いたんだが……」

「……え？」

見れば、薫くんが爆笑していた。

「……今日、内閣総理大臣に就任したのは河部晋二さんです……」

私はもう前を見れない。下を向きながら笑い転げている薫くんを睨みつけた。

「お、おう。そうだな。河部晋二だ。なんか悪いな、橘。答えさせて」

視線が私に集中する。私は机の上に腕を組んで、そこに顔をうずめ続けた――。

そんなことがあって、授業が終わって私の周りには何人かの人が集まった。

「絵里、さっきはどうしたの？ キヤラじゃないよね、というか、なんで桶狭間？」

「まあまあ、夏実。絵里は疲れてるからそつとしてあげよう？ のこともあるし」

「うん、まだちよつと疲れてるのかも……ごめんね、心配かけて」

「そうなの？ でも、こんなこと言うのもなんだけど元氣そうだよね。さっきも一人で笑ってたけど、思い出し笑いとか？」

『あー絵里ちゃん早くご飯食べようよー』

「そ、そんなことないよ。今も頭が痛くって……」

薫くんがずつと話しかけてくるから、ホントに頭が痛い。何してるんだろうと思って見てみたら、窓のフレームに足をかけていた。

『絵里ちゃん！ 無視しないでよ！ 飛び降りるよ！』

いや、もう死んでるし飛べるじゃん……。

「うう……」

「え、絵里……ほんとに疲れてるみたいだね。まあそんなに気負わないようにね」

「うん、心配してくれてありがと。ちよつと楽になったよ」

私は笑顔を作って言う。

こーやって、みんなが普通に話してくれるのは嬉しい。

でも、違和感を感じる。

何でみんな、こーも普通に話してくれるんだろう。

そう。薫くんという存在がなくなったのに。その事実だけが追加されたみたいに、周りは何も変わってない。

まるで——まるで、薫くんがいないことが当然であるかのように。いつもと同じように、日常は廻り続けている。

そりゃ私だって薫くんと仲が良かったわけじゃない。というか、話したこともなかった気がする。いなくなっても、何も変わらなかつたと思う。

だから人が死ぬって、案外こんなものなのかもしれない。

でも、私は忘れちゃいけないんだと思う。薫くんの最後の言葉と、最後の姿を見たのは、私だけだから。

Kaoru

『おっ、絵里ちゃん。おはよう』

「ん」

絵里ちゃんが寝起きの頭を起こすように頭を振る。

僕は、美香ちゃんから借りたタブレットで、夜通し小説を読んでいた。ちなみに一分に1ページ進むスライドショー機能を使っている。

「……薫くん、暗闇でずっと読んでたら視力悪くなるよ」

『えっ、絵里ちゃんが心配してくれてる……?』

「べ、別にそんなんじゃないよ。ちよっと寝ぼけてただけだから気にしないで」

「お姉ちゃん！ 朝だよー！」

そんな寝ぼけた絵里ちゃんを知ってか、美香ちゃんがドアを勢い良く開ける。同時に白い光が目の前に広がる。

「きゃっ！ びっくりした……美香あー、朝は静かにしてっいつも言ってるでしょー」

「ふっふっふ、美香はお姉ちゃんの驚いた顔が見たいの！ いい顔してるなあ」

どうやら、白い光はカメラのフラッシュだったらしい。美香ちゃんはそれをニヤニヤしながら見ている。

「はーやーくー消ーしーてー」

『美香ちゃん、ドアの外に三十分ぐらい前からいたからね』

「ぐりぐりぐり……。ふうん、薫くん、部屋から出てたの？」

『うん、トイレ行ってたから』

「何それ、全然意味わかんない……まあいいや」

「あいたたたた……お姉ちゃん、もうご飯できてるみたいだから下降りよ？」

「さつき降りようとしたのを誰が止めたのかなあ？」

美香ちゃんがギクツというような顔をする。

「うう、そんなにいじめないでよお姉ちゃん……」

『まあまあ、絵里ちゃん。美香ちゃんも反省してるし、許してあげよ?』

「別に、元からそんなに怒ってないよ。さ、美香。下降りるよ」

絵里ちゃんの顔が綻ぶ。この二人の仲の良さを見てみると、僕も元気になる。

ただ思うのは、絵里ちゃんが普段笑わないのは美香ちゃんがいるからだと思う。絵里ちゃんは、美香ちゃんに甘えているだと思ふ。

僕はもつと絵里ちゃんに笑ってほしい。もつと楽しんでほしい。恋もしてほしい。もつと充実してほしい。

『君には笑顔がよく似合うから』

「……薫くん、寒い。嬉しくないわけじゃないけど、寒い」

絵里ちゃんの頬が少しだけ赤く染まる。

『いや、小説にこんなセリフがあってね。ちよつと言ってみたくなって』

「ふーん……よくそういうこと平気で言えるよね」

『そりゃまあ、絵里ちゃんのこと大好きだからね!』

「んなつ……何よ朝から、もう、調子狂うなあ、もう……」

絵里ちゃんは下を向いて、頭の中でバカと連呼している。最近は反応のバリエーションも増えてきて、見ていて楽しい。

「……お姉ちゃん、顔真っ赤だよ？」

下から覗き込むように美香ちゃんが言う。手には不自然な方向に向けて操作されるスマートフォン……あれはきつと無音カメラか何かだろう。

「何でもないの……キニシナイデ……」

こんな生活が続けばいい。そしてこの可愛らしい表情も、どこでも出せるようにしてほしい。僕が幽体になってまで成し遂げたいことは、絵里ちゃんを笑顔にすることだから。

Eri

あの事故から、一ヶ月が経つ。帰り道、私はイヤホンを外して歩く。

「ねえ、薫くん」

『ん？ 何？』

あの事故があった横断歩道にさしかかる。赤信号が私の道を遮って、歩みを止める。

「あれから一ヶ月経ったんだね」

『覚えててくれたんだ、嬉しいな。僕と絵里ちゃんの記念日だからね』

「何言ってるの。そんないいものじゃないでしょ」

薫くんは無邪気に笑う。呆れるけど、ちよつと楽しい。

「ねえ、薫くん。」

薫くんが幽霊になって、私の日常は変わった。ちよつと、いや、すごく楽しくなった。

でも、どうしてって思う。私のこと、恨んでないの？ なんで私に、そんなに優しくするの？

私が薫くんを、殺したんだよ。

『ん？ 何？』

でも私はそれが言えない。

今が楽しいから。

ほんとの思いを聞くのが怖いから。

「今日の晩御飯気になるから、飛んで見にいったよ」

『仕方ないなあ……すぐ戻ってくるからね、絵里ちゃん』

「別にそんな早くしなくていいよ……いつてらっしゃい」

いつの間にか、薫くんが私の心の中にいた。幽霊としてじゃなくて、紛れもない私自身の気持ち。薫くんの笑顔が私を笑顔にしてくれた。だから、私も薫くんに惹かれてた。

薫くんの言葉の一つひとつから、優しさが伝わってくる。意味の無いような事も、私を笑顔にしようという思いが伝わってくる。

「好きだよ」

もっと前に出会えたかった。生きてるうちにもっと話したかった……。

『すき……だよ』

「えっ!？」

言葉に反応して顔をあげると、薫くんが帰ってきていた。

『いや、すき焼きだよって。どうかした?』

「あ、うん。すき焼きね。ありがと」

でも幽霊でもいいんだ。ずっと一緒にいられるから。誰にも取られないから。

「ふふっ」

『絵里ちゃん、嬉しそうだね。すき焼き好きなの?』

私は素直じゃないから、今言っておきたい言葉がある。

「うん、大好きだよ」

これ以上ない笑顔で。

Kaoru

最近、絵里ちゃんはよく笑うようになった。友達と話すことも増えたし、美香ちゃんともあいかわらず仲が良い。

ゲームは相変わらずやっているけれど、いつも楽しそうだ。

本当に良かったと思う。僕がこのままいなくなっても、もう問題ないはずだ。だから、そろそろ僕は在るべき場所に戻らないといけない。

『ねえ、絵里ちゃん』

絵里ちゃんは今ゲームの待機中で、椅子に座って漫画を読んでいる。

「うん? なに、薫くん」

『僕、そろそろ帰ろうと思うんだ』

「……? どこに帰るの?」

絵里ちゃんは椅子を回転させてこっちを向く。その顔は、意外にも辛そうな顔をしている。た。

『僕は幽霊だからさ、そろそろ本来の居場所に戻らないといけないんだ。寂しいと思うけど、許してね』

絵里ちゃんの顔が強がる。複雑な感情が入り乱れていて、心への侵入も許してくれない。

「へ、へえ……そうなんだ……別に寂しくないけど、だって、元に戻るだけだし」

『で、そろそろ時間みたいなんだよね。今も呼びがかかって、早く行かないといけないみたいなんだ』

絵里ちゃんは深くため息を吐いた。

「ふう……。やっとおさらばできるんだね、あースッキリするなあ。うんうん、薫くんならどこに居ても楽しくやれると思うし、うん。頑張ってるね」

明らかに震えた声。絵里ちゃんは椅子を回転させて向こうを向いてしまった。

『絵里ちゃん……じゃあ、そろそろ行くね』

「……うん」

僕は意識を集中させて、戻る準備をする。半透明な体が更に薄くなっていく。絵里ちゃんはいつの間にか、また振り返っていた。そして口を静かに開いた。

「ありがとう」

そんなことを照れた顔で言うから、僕は仕返しをする。

『好きだよ』

そして、僕は音も立てず静かに消えた。

Eri

ウソ。嘘だよ。なんで消えちゃうの。ずっと一緒だと思ってたのに。心のスペースがやけに広い。これまでは半分こだったから。薫くんが消えたって、確かにわかるから。

「好きだよ」

薫くんは最後に言ってくれた。私はまた言えなかった。何回もチャンスはあったはずなのに。

「好き、だよ」

口にしたら涙が出てくる。自分の不甲斐なさに、臆病さに。

「ずっと一緒にいてよ」

あんなに近くにいたんだよ。表せないぐらい近くに。

「もう私一人じゃ駄目なんだよ！」

泣く声が止まらない。さっきの声、おっきかったかな。近所迷惑だったかな。隣の美香に聞こえてるのかな。考えるのは考えるけど、涙も声も止まらない。

そんな時、ドアの開く音に反応して私は顔を上げた。

「お姉ちゃん……？ どうしたの？」

そこに美香がいた。でも、そんなことは関係なかった。誰かに言いたかった。薫くんと言えなかった言葉がどっと溢れ出す。美香に言っても伝わるわけがないのに。

「美香……薫くん、消えちゃった」

「薫くん」と言葉に出すと、また涙があふれる。美香は、それを聞いて穏やかな表情になる。それだけで、私よりずっと大人に見える。

「うん……。お姉ちゃん、薫くんのこと、好きだった？」

一番聞いてほしかったこと、でもこれまでの私が答えられなかったこと。薫くんはたまに心を読んでいたらけれど、美香も同じように、私の心を読んでくれてるのかな。

「……好きだった……大好きだった。ずっと一緒にいたいと思ってた。幽霊だって気にな

らないぐらい好きだった。薫くん、消えるときに好きだって言ってくれた。でも、私、言えなかった。ありがとうって、言っただけだった……悔しいよ……もっと話したいことも、もっと伝えたいこともいっぱいあったのに。なん、で……なんで。なんで消えちゃうの。薫くん……」

「お姉ちゃん」

美香が私を抱きしめてくる。

「美香ね、まだ恋したことないんだ。でもお姉ちゃんのこと大好きだから。お姉ちゃんも美香のこと、好きだよ。だから、薫くんもちゃんとわかってくれるよ。お姉ちゃんの思いを」

「でも、でも私は言いたかったの。直接言いたかったの。私の声で、言葉で伝えたかったのー！」

「……ふふっ」

美香が怪しい笑いをする。

「お姉ちゃん、じゃあ、直接言えばいいんじゃないかな？」

「そっ、それが出来ないから、泣いてるんでしょうが……」

「あ、あはははっ」

あ、あれ……怪しすぎる……絶対裏がある。もしかして、薫くんと美香がいつの間にか同盟を組んでいたとか？ でも、確かにもう薫くんはいないし、そもそも美香には見えなはず。でも美香が怪しすぎるから、涙も止まってしまった。

「お姉ちゃん、実はさっき電話があっただ。それを伝えようと思ってここに来たんだけど……思わぬ収穫だなあ」

美香はポケットから機械を取り出した。ボタンを押すとピツという音が鳴って、録音終了という文字が表示された。

「……はっ？」

「これで一生お姉ちゃん成分を補給できるよ！ ありがとう薫くん！」

「ちよっ、ちよっ和美香。ふざけすぎだよ？ 怒るよ？」

「ごめんごめん、あと、これ。私が言うよりこっちの方が早いよね」

美香はそういうと、スマートフォンを差し出してきた。

「え、通話中……？」

「あっ、ごめん。急いでたから電話切るのも忘れちゃって。あんなすごい告白を聞くとは思わなくて、そのまま流しちゃった」

ディスプレイを見ると、相手は霧島和仁と書いてある。私はおそるおそる話しかけた。

「……もしも……？」

「あ、うん。絵里ちゃん？ あの、うん。薫、だけど」

「は……？ いやいや、誰？ 薫くんはもういないよ」

「や、薫、だよ」

「だ、だって薫くんはもう……。しかもこんなもったりするのが薫くんわけないじゃん！ 私を騙そうとしてもそうはいかないよ！」

「いや、あんなこと聞かされたら僕だって……」

「ん？ あんなことって何？」

「お姉ちゃん、相手はほんとに薫くんだよ。薫くんの意識が戻ったら真っ先に美香に電話してほしいって、薫くんのお父さんに伝えてたんだ。で、さっき薫くんの意識が戻ったんだよね」

「えつと……?? つまり、帰る場所とか本来の居場所とかって言ったのは、自分の体ってこと??」

「うん、そうなんだけど、驚かせようと思って言ってなかったんだ。美香ちゃんがそんな用意してるとは思ってたけど……で、なんか結果的に、僕の方が驚くことになっちゃったんだよね……」

「……はっ！」

そうか。私、さっきまで色々恥ずかしいこと言ってた気がする。それを薫くんが聞いた？

「……さっきのつて、全部、聞いた？」

「うん……」

「あああああ……嘘でしょ、うそ、嘘。全部嘘だから。聞かなかったことにして！」

「ふふつ、じゃあそういう事にしとくよ」

「えっ……うん。そんなあっさりされると逆に悲しいんだけど……」

でも、つい笑ってしまう。嬉しいからっていうのもあると思う。でも何より、私が変わったんだ。

「薫くん、すぐ戻るの？」

「うん、たぶん大丈夫だと思うよ。そんなに長くはかからないと思うし、すぐ学校に行くよ」

「そっか、じゃあまた、だね」

夢にも思わなかったこんなやり取り。薫くんは幽霊だって印象が強すぎるから。

「また、やり直そう。今度は初めましてだよ。私、薫くんと話したことないし……」

「うん、了解。父さんが体がまだ万全じゃないんだから寝てろってうるさいんだよね。だから、今日はそろそろ寝ようかな」

「そうだよね……あ、薫くん、一ついいかな」

「うん？」

「薫くん……好きだよ」

恥ずかしいから、言っただけに切っただけ。でも、横でずっと見ていた美香が。

「お姉ちゃん、お幸せに」
なんて言うもんだから、私は逃げるようにベッドに潜り込んだ。
「……ありがとう」
これまで、私が言えなかった言葉を送って。

Eri

あの事故から八年。薫くんは就職して、私も大学を卒業した。
そして今日。生涯に刻まれる記念日を迎えた。多くの友人と親戚が集まる、人生で一度しかない神聖な日。

これまでを考えると、とても感慨深い。クラスメイトに事故から助けられて、幽霊が憑りついて、その幽霊と結婚するなんて。

「絵里、何かあったの？」

「あつ……。ううん、何でもないよ。もう着替えたし、早く和仁さんにご挨拶に行かないとね」

「ポーっとしてるなあ……。熱でも出た？ おでこ出して」

私がおでこを出すと、薫くんは近づいてきておでこをくつつける。バカだなあ、最近はその測り方しないよ……。

「そんなことしないで手で測ってよ……。恥ずかしいよ、もう」

私が怒ると悪戯っぽく笑うんだ。少年っぽいと言うより、おてんば少女。

そんな彼が息を呑む。そしてキリっとしたキメ顔で、私に言う。

「絵里、ずっと一緒にいよう」

私は笑った。腹が割れるぐらい笑った。顔が面白かったから。しかも、そんな当然のことを言ってくるから。

「私たち、零距离だったんだから。ずっと一緒に、なんて難易度低すぎでしょ？」

私も真似して、キメ顔で言う。彼は笑わない。笑わないで、私に近づいてくる。

そしてまた、距離は零になるんだ。

Fin.